

IV 音楽科 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 聴き合うことで、音楽的に高まっていくことができる省察の工夫

音楽科では、研究の重点の一つとして「聴く力」を高める省察の工夫に取り組んできた。一人一人の「聴く耳」を育てていくことが大切であり、「聴く耳」が育つことで音楽が好きになり生活の中に音楽を取り入れようとする。生涯を通じて音楽を愛好する基盤にもなるはずである。自分の音や声、友達の音や声を聴き合い確かめ合うことで、お互いに演奏の技能が高まり、それが自信につながり伝え合いたい・聴いてほしいという思いに結び付いたことが成果である。

授業では、導入段階で前時までの自分たちの力を省察する時間を設けた。既習曲を歌ったり楽器で演奏したりしたとき、必ず聴き合う場面をつくり、「対話」による協働的なフィードバックから、よい点や直したらよい点を、音楽的な「見方・考え方」を根拠にして伝え合った。自分たちにとつての課題を確認することができ、そこから本時の課題が生まれてくることもあり、子どもたちが本当に必要とする活動が展開できた。活動形態も、ペア、グループ、全体と人数を変えて行うことを取り入れ、自分の耳で聴き伝えなければいけない場面を作っていた。そこから、子どもたちが認めるモデルとなるペアやグループが現れることで、「あんなふうに演奏できるようになりたい。」と意欲も高まり、音楽的な表現にも高まりが見られた。また、授業の終末には、ミニ発表会を開き「聴き役」「演奏する役」を交互に行うことで、それぞれの立場からフィードバックし合う協働的な省察場面から、演奏の高まりにつなげることができた。技能面においても、個で繰り返し練習してからペアで聴き合ったり、ペアやグループで教え合ったりする中で、音楽表現の幅が広がり、自信をもって演奏する姿が見られた。このような活動を通して、確実に技能の習得が高まったと考える。

(2) 視点を明確にして音楽的な活動を積み重ねていくことで、音楽的な「見方・考え方」を自覚的に用いる

研究の重点二つ目として、鑑賞と表現を融合させた学習活動に力を入れて取り組んできた。表現の授業づくりにおいても、導入で鑑賞を効果的に取り入れることで、子どもたちがその題材で中心となる音楽的な「見方・考え方」に気付くことができ、それを音楽表現のよりどころとして活動していくことができたことが成果である。

音楽的な「見方・考え方」は、日々の授業の中で積み重ねられていくものであると考える。新しい曲と出会ったとき、楽譜を見たり曲を聴いたりして気付くことは、音楽を形づくっている要素に直結している。「ここは、言葉のまとまりからつなげて歌った方がいい。」という子どもからの気付きには「それを、フレーズと言うんだよ。」と知識とつなげ、「ハマっているみたい。」という気付きには「それは、音の重なりがあるからだね。」と音楽的な「見方・考え方」へとつなげることで、言葉が意味付けられ、自分のものとなっていくと考える。

1年の鑑賞の学習では、呼びかけとこたえに着目し、体を動かす活動を通して繰り返し聴き直すこと（省察）で課題を見つけていくことができた。表現（歌唱）の学習で呼びかけを経験したことが、鑑賞の学習にも生かされていたことは言うまでもない。曲のよさを感じ取るためには、まず聴き取ることが必要である。感じ取ったことや思い浮かべたことを意識化し、それがどのような音楽の構造から生み出されているのかに目を向けさせることが大切であることを再確認できた。また、自分が見い出したよさなどについて、音楽的な理由（音楽的な「見方・考え方」）と関わらせながら、友達と「対話」を重ねることも、音楽的な「見方・考え方」を自覚的に用いる力を高めるには有効であった。まさに、音楽的な「見方・考え方」を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさを見い出したりするなどの学習が展開されていた場面であった。

これらのことから、それぞれの題材でどの音楽的な「見方・考え方」を働かせていくのかを教師が明確にし、意図的に繰り返し働かせる場を設定することが、「声を合わせて歌う」「曲の雰囲気と音楽を形づくっている要素との関わり合いについて聴く」などの音楽的な資質・能力を高めていくことに効果的であったと考える。

2 課題 「聴き役」からのアドバイスや感想が、どの程度音楽的な「見方・考え方」に基づいたものになっているのか。

子どもたちがお互いに聴き合う活動の中で、演奏に対してアドバイスや感想を伝える場面を設けている。そこでは、音楽的な「見方・考え方」に基づいた的確な発言もあるが、そうではない発言も見られるのが現状である。音程や音の長さが違うなど、明らかに分かることであればアドバイスや感想も話しやすいが、例えば音の重なりなどは判断が難しい。そのようなとき、教師側からの的確な助言や価値付けが大切になると考える。お互いのよさを見つけないと伝え合うことは、子どもたちの意欲を向上させるには効果的な活動であるが、果たしてそのよさが、音楽的な「見方・考え方」に基づいたものとしてふさわしいのか、教師が判断し、フィードバックを与えていくことも必要となる。子どもたちの発言だけで終わるのではなく、教師がその発言を取り上げて価値付けをし、全体で共有していくこと、繰り返し積み重ねていくことが「聴く耳」を育てていく上でも重要であると考え。学年を問わず、よりよい音・音楽を求め続けるとともに、感性を磨き技能を高めようとする態度を育てていきたい。